

「新潟」の登場を考える PART II

長谷川 伸

「永禄年間」の「新潟津」について

『帆橋成林』第十七号で述べたように、文献史料上の「新潟」という地名の初見は、高野山清浄心院所蔵の「越後過去名簿」の登場により、永正十七(一五二〇)年に遡りました。ところが、近年のある仏像の調査と再評価により、戦国時代の「新潟津」について新たな事実が発見されました。

魚沼市(旧北魚沼郡堀之内町)の真言宗大悲山弘誓寺には、木造の不動明王坐像があります(写真1)。

これは本尊聖観世音菩薩像の脇侍として安置されていますが、もともとは客殿の本尊でした。寄木造りの像高が六〇cm位の像で、何度かの火災をくぐり抜け、左目が焼け爛れています。この両脚部の底部を調査したところ、「越後国蒲原郡平嶋之郷新潟津不動院之御本尊仁奉造立之、本地愚僧蒲原所生之者也、事聞而成望、権大僧都法印教印奉造作之、



写真1「不動明王坐像(正面)」



写真2「不動明王坐像 底部墨書」

(中略)：永禄九年」という墨書の存在が確認されたのです(写真2)。この不動明王坐像は蒲原生まれの「権大僧都法印教印」が発願し、中略部分の記載から、仏師は運慶流から派生した京都七条流の康西であることがわかりました。これは紛れもなく戦国時代の「新潟津」を考える上で重要な発見であるといえるでしょう。

この寺院は「越後過去名簿」において、「新潟」の住民の供養の取次役として、既に天文九(一五四〇)～四二(一五九二)年頃に登場していました。各種の由緒では、開基は不明、かつては醍醐寺報恩院流の末寺であり、天文(永禄年間)に教印の中興と伝えられました。坐像底部の墨書により、「教印」という僧が実在したことが明らかになりました。

林所(真言宗の地方学問道場)となりました。しかし、どうしてこの不動明王坐像が弘誓寺にあるのかについては、よくわかっていません。そこで改めて「永禄九年」「平嶋之郷新潟津不動院」とある墨書を考えてみましょう。永禄九(一五六六)年段階では、平嶋郷の中に新潟津があるということになります。現在平嶋(西区)は信濃川の本流と分水路西川の合流地点付近に位置し、周辺には川越の波切り名号や焼鮎伝説といった親鸞七不思議伝説の故地、信濃川の対岸には逆さ竹の西方寺や親鸞・蓮如の来訪伝説のある鳥屋野浄光寺があります。天正八(一五八〇)年上杉景勝は「平嶋之関」に代官を任命し管理していますが、これらから平嶋は中世期の信濃川の渡し場であった可能性があります。つまり、信濃川渡河点と信濃川左岸の自然堤防上を行く北国街道との結節点に位置し、砂丘列の発達・安定化により町場が形成された平嶋を中心とする「平嶋之郷」の中に、戦国時代の「新潟津」が存在したと考えられるのではないのでしょうか。

このように、文化財の新たな評価などから、中世の「新潟」の登場を考える謎解きは、新たな研究段階に入ったといえるでしょう。(はせがわ しん 学芸員)

誘発地震

新潟市歴史博物館 館長 小林 昌二

三月十一日午後二時四十六分、マグニチュード九・〇の超巨大地震(東北地方太平洋沖地震)が長く激しい揺れで東日本全域を襲い、直後の午後三時八分、岩手県沖を震源に七・四、午後三時十五分に茨城県沖で七・七、午後三時二十五分に宮城県沖で七・五と、立て続けに震源域内で余震が勃発しました。西区の自宅にいた私は、すぐにテレビに見入り、人や車や建物を襲う巨大津波の映像を、息をのんで見守るばかりで、余震の記憶はどうも定かではありません。

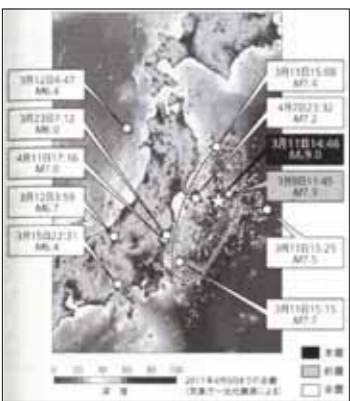
うようようになりました。はたせるかな、六月になって一般向けの地震専門書「超巨大地震に迫る」(NHK出版新書六月十日刊)を読んだ、それが「誘発地震」と言われるものであることを初めて知った次第です。著者は、地震研究の最前線にある東京大学地震研究所の大木聖子さん、纏綿一起さんのお二人の先生ですが、「あとがきにかえて」の「本書の印税は、すべてあしなが育英会の震災遺児に寄付」とあることに心打されました。また第五章「防災」正しく恐れる」は、国民必読と思われ、私は超ミリオンセラーになることを願っているところです。

夕刻に電話が通じ、副館長から入館者も職員も、また館も無事とのこと、まずは休心し、明朝まで余震や津波警報に注意しながら、事態を見守ることにしました。

そして貞観の地震堆積物の調査が、三陸海岸や茨城県太平洋岸には及んでおらず、未完の状態にあり、こうした過去の歴史的地震データを網羅的に収集することが、地震の長期的評価のために大事だ(一三五頁)と述べています。こうした歴史に学び研究すべきだという提言の意義を深く考えてみたいものです。

館長日記

地震で余震の激しさを分かったつもりでしたが、今回は震源から遠く離れた所で、どうして大きな地震が起きるのかと疑問に思



本震発生から1ヶ月間の地震活動(点線は震源域を示す) [出典:「超巨大地震に迫る」日本列島で何が起きているのか「第3章 引き起こされたさまざまな現象」(90頁 図3-3) (NHK出版発行 2011年6月10日)]

収蔵資料紹介

『新潟朝顔会雑誌 自第壹号至第五号 秋莊園主人写』 明治四十一年頃

アサガオを描いた資料をご紹介します。とはいえ、この奇妙な植物の絵、あまりアサガオらしく見えないかも知れません。これは、明治から大正にかけて活動した「新潟朝顔会」の会誌を、秋莊園という人が手書きで写しとった資料です。新潟朝顔会は、アサガオを栽培して鑑賞する同好会でしたが、大輪を咲かすことではなく、「変化朝顔」といわれる突然変異系のアサガオを交配させ、風変わりな花や葉をつくることを楽しんだ会でした。現在では遺伝のメカニズムが明らかになっていますが、当時その栽培法は専門家の奥義とされ、妖しい魅力にひかれたマニアたちが種や情報を交換しあっていたのです。

アサガオの奇花を珍重する趣味は、江戸時代の文化文政期に始まり、嘉永安政期に第二次ブームが起こったと伝えられています。いずれも江戸や大坂が中心でした。明治に入ると、二十六年に東京の積久会が変化朝顔の品評会を開き、会誌も発行したことでブームは地方にも飛び火し、明治四十一年までに大阪、名古屋、新潟、仙台などでもアサガオの会が生まれました。新潟では、明治三十年に新潟朝顔会の前身である「新潟朝顔同好会」が発足します。その普及を早めた中心的な人物が、近藤鑑之助でした。濁川の地主だった近藤は、明治十八年



からアサガオをつくり、東京の積久会にも会員として参加していました。その近藤が牽引役となって新潟に同好会が立ち上がったのです。三十六年には最初の会誌を発行し、口絵には「秋晴園」という園名を号した近藤の手にする写生画が、多色石版印刷で掲載されました。会員は明治三十六年から五年間で三倍に増え、近藤は自分の育てた種が「県下到处に行き渡っている」として、のちに感慨深く述懐しています。

食えもせず飯の種にもなりそうにない変化朝顔を、近藤は「只自己の楽みに過ぎない」と自嘲ぎみに語りまします。それでも新潟朝顔会は、大正九年まで毎年展覧会を開きました。会場は、県物産陳列所の貸し室。新潟の近代化を駆り立てた産業の磁場の片隅で、園芸とも芸術とも定めがたい珍妙なアサガオの趣味世界が、花を咲かせていたのです。

(木村一貫 学芸員)